

# 抄略文からみた『天台伝南岳心要』

池田魯參

## 一、はじめに

「天台大師千四百年御遠忌記念出版」として刊行された『天台大師研究』(平成九年三月・天台学会)の中で、『摩訶止観』に関する研究が多く収められていて注目される。私の目にとまつたものだけであるが、収録順に列挙してみると次のようないふてある。

村中祐生「破法遍の事実性と論理性」

池田魯參「『摩訶止観』と『法華三昧』」

仙石景章「三諦円融と明鏡の譬喻について」

岩城英規、「現前一念心」の考察—『摩訶止観』「觀不思議境」の展開として—」

小林順彦「天台智顥における淨土觀—『摩訶止観』を中心として—」

山内舜雄「『摩訶止観』と『正法眼藏』」

石島尚雄「智者大師と道元禪師—道元が参じた天台学をめぐって—」

末木文美士「伝南岳三部書と伝忠尋釈書」

Paul Groner「中古天台における『摩訶止観』の理解—『漢光類聚』とその歴史的背景について—」

窪田哲正「日本天台における『摩訶止観』受容の一考察—「元初一念」観境説をめぐって—」

David W. Chapell “Buddhist Compassion(ci-bei) and Chih-i’s Moho Chih-Kuan”

私はアメリカから帰国後、『詳解摩訶止観』全三巻の刊行にかかり切りになり、地巻「研究注釈篇」を直前に刊行するばかりの状況であったこともあり、これらの諸論文に啓発されるところが大きかった。

なかでも、末木文美士氏と、ポール・グローナー氏の論文は、『天台伝南岳心要』と、その注釈書として成立する『漢

光類聚』の研究であり、両氏の学説には微妙な見解の相異も認められるが、一組の論文として興味深く拝読させて頂いた。

五年前のことになるが、私はアメリカに渡つて、ヴァージニア大学のポール・グローナー氏と共に二年間、『漢光類聚』や、安然の『発菩提心義抄』など日本天台の典籍を読む機会に恵まれたのであるが、存分に今後の天台研究の展望を模索した日々のことが昨日のことのようになつかしく想い起される。グローナー氏はすでに『漢光類聚』に関する二本の論文を発表されているのであるが、私の方はといえばまだ一編もない。これではお世話になつたグローナー氏に対しても申しわけがつかないので、ずっと気にかけていたことであつた。

ちょうどそんな折に、駒沢大学仏教学部主催の仏教学会（平成九年五月二十八日）で、『詳解摩訶止観』の刊行を終えた感想

## 二、『心要』の抄出状況

『心要』は全文が『摩訶止観』から抄出した文章を合成しあるが、切角の機会であるからと考え直し、新たに『天台伝南岳心要』について、ここでまとめたようなことを発表させて頂いたわけである。

それというのも、従来の『天台伝南岳心要』（以下『心要』と略す）の研究は、いま一つツメが甘いように私には感じられるからである。『心要』は、本論で明示したように、始め

から終りまですべて『摩訶止観』の抄略文で作られているのであるから、むしろ『心要』の作者が『摩訶止観』の修証論のどこに注目し、何を捨てたか、というような視点で、『心要』の作者の『摩訶止観』に対する評価がどのような所にあるのか、その全体像を把握することが先決ではないかと考えるのである。この点を明らかにした上で、『心要』の原文にそつて独自の見解を展開した『漢光類聚』の撰述意図やその教説が意味するところを初めて充分に読み解くことができるのでなかろうかと考える。

したがつて、本論では、『心要』が『摩訶止観』の文章をどのように抄出し、『摩訶止観』の修証論をどのようなものとしてまとめたのか、その跡形を厳密にたどることを課題として、『心要』の成立背景について考えてみたい。

①～③までの『心要』の文に対応する『摩訶止観』の原文を下段に逐次示し、後に両文を対照して知られる問題点を各段毎に提示してみたい。

①天台伝南岳心要

②一問。諸法寂滅相。不可以言宣。有何所以而說止觀耶。

③答。一切諸法本是仏法。

天台傳南岳三種止觀。一漸次。二不定。三圓頓。(1c)  
疑者云。諸法寂滅相。不可以言宣。大經云。生生不可說。乃至不生不生不可說。若通若別。言語道斷無能說無所說。身子云。吾聞解脫之中無有言說。故吾於此不知所云。淨名云。其所說者無說無示。其聽法者無聞無得。斯人不能說。斯法不可說。而言示人。(3a)

意止觀者。端坐正念蠲除惡覺捨諸亂想莫雜思惟不取相貌。但專繫緣法界一念法界。繫緣是止。一念是觀。信一切法皆是佛法。無前無後無復際畔無知者無說者。若無知無說。則非有非無非知者非不知者。離此二邊住無所住。如諸佛住。安處寂滅法界。聞此深法勿生驚怖。此法界亦名菩提。亦名不可思議境界。亦名般若。亦名不生不滅。如是等一切法與法界無二無別。聞無二無別勿生疑惑。(11c)

於名字中通達解了。知一切法皆是佛法。是爲名字即菩提。

(10b)

④今人意鈍玄覽則難。眼依色入。假文則易。故以文示之。須知文非文文字即解脫。離文字求解脫無有是處也。

若競說默。不解教意去理逾遠。離說無理。離理無說。即說無說。無說即說。無二無別即事而真。大悲憐愍一切無聞。如月隱重山舉扇類之。風息太虛動樹訓之。今人意鈍玄覽則難。眠依色入。假文則易。若封文爲害。須知文非文。達一切文非文。非不文。能於一文得一切解。爲此義故以三種文作達一門也。已畧說緣起竟。(3b)

⑤天台智者伝南岳惠思大師。円頓止觀分一。先略。次廣。

俱緣實相。同名止觀。（1c）

又五畧極是十廣。（5b）

⑥略者。初緣實相。造境即中。無不真實。繫緣法界。一念法界。一色一香無非中道。己界及佛界衆生界亦然。陰入皆如無苦可捨。無明塵勞即是菩提無集可斷。邊邪皆中正無道可修。生死即涅槃無滅可證。無苦無集。故無世間。無道無滅。故無出世間。純一實相實相外更無別法。法性寂然名止。寂而常照。雖言初後無二無別。是名圓頓止觀。

⑦云何名聞圓法。聞生死即法身。煩惱即般若。結業即解脫。雖有三名而無三體。雖是一體而立三名。是三即一相。其實無有異。法身究竟般若解脫亦究竟。般若清淨餘亦清淨。解脫自在在余亦自在。

云何聞圓法。聞生死即法身。煩惱即般若。結業即解脫。雖有三名而無三體。雖是一體而立三名。是三即一相。其實無有異。法身究竟般若解脫亦究竟。般若清淨餘亦清淨。解脫自在餘亦自在。聞一切法亦如是。皆具佛法無所減少。是名聞圓法。（2a）

⑧歷六塵境。六作緣。並是因緣生心。常用一心三觀々之。即是行名如來行。

端坐觀陰入。如上說。歷緣對境觀陰界者。緣謂六作。境謂六塵。大論云於緣生作者。於塵生受者。（10b）

圓觀。正直捨方便。但說無上道。唯此一事實。餘一則非真。說最實事。是名教實。行如來行。入如來室。衣座等。復有一行是如來行。是名行實。所見中道即一究竟。同於如來所得法身。無異無別。是名證實。（33a）

⑨復須無緣慈悲愍傷一切。自利利他發四弘誓願。依四諦理而發之。

二修中觀因緣者。畧爲五。一爲無緣慈悲。一滿弘誓願。三求佛智慧。四學大方便。五修牢強精進。

一無緣慈悲者。即如來慈悲也。此慈悲與實相同體。不取衆生相故非愛見。不取涅槃相故非空寂。非空寂故非法緣慈悲。非愛見故非衆生緣。無一邊相故名無緣。

(中畧)

二滿本弘誓者。初發心時起四弘誓與虛空等。空假兩觀知苦斷集。猶如枝葉。所未知斷。喻若根本。空假兩觀修道證滅。猶如燈炬諸山幽闇力不能明。雖修兩觀誓願未滿。譬如百川不能溢海。娑伽羅龍王所靈泉池。一霽即滿。中道正觀亦復如是。知一切苦。斷法界集。修無上道。證究竟滅。爲滿本願故。須

修第三觀 (81 a ∑ b)

二發真正菩提心者。旣深識不思議境。知一苦一切苦。自悲昔無邊誓願知依道諦境。無上菩提誓願証依滅諦境。雖知衆生煩惱如法界。以大悲故誓拔如法界衆生生死之苦。雖知法門仏果非修非証。以大慈故而修而証。與衆生涅槃之樂名真正菩提。

(中畧)

即起大悲與兩誓願。衆生無邊誓願度。煩惱無數誓願斷。衆生雖如虛空。誓度如空之衆生。雖知煩惱無所有。誓斷無所有之煩惱。

(中畧)

故起大慈與兩誓願。謂法門無量誓願知。無上佛道誓願成。雖知法門永寂如空。誓願修行永寂。雖知菩提無所有。無所有中吾故求之。(55 c ∑ 56 b)

約六即顯是者。  
爲初心是。爲後心是。

⑪亦名六即六仏。

一切衆生之心性即理即仏。了心三諦名字即

仏。觀念相統觀行即仏。六根清淨相似即仏。從初住至等覺分

真即仏。唯仏与仏究竟即仏。即故初中後皆是。六故簡濫。

答。如論焦炷。非初不離初。非後不離後。若智信具足聞一念即是。信故不謗智故不懼。初後皆是。若無信。高推聖境非己智分。若無智。起增上慢謂己均佛。初後俱非。

爲此事故須知六即。謂理即。名字即。觀行即。相似即。分真即。究竟即。此六即者。始凡終聖。始凡故除疑怯。終聖故除慢大。

理即者。一念心即如來藏理。如故即空。藏故即假。理故即中。三智一心中具。不可思議。如上說。三諦一諦非三非一。一色一香具一切法。一切心亦復如是。是名理即是菩提心。亦是理即止觀。即寂名止。即照名觀。（中畧）間。釋論五菩提意云向。答。論堅判別位。今堅判圓位。會之發心對名字。伏心對觀行。明心對相似。出到對分真。無上對究竟。又用彼有名圓位。發心是十住。伏心是十行。（10 b ～ c）

⑫中論云。真法及說者聽衆難得。故知。如是則生死非有邊非無邊。

論云。真法及說者聽衆難得故。如是則生死非有邊非無邊。實相非難非易。非有非無。此名真法。能如此說聽名真說聽。有三悉檀益名有邊。第一義益名非有邊非無邊。故知。緣起能辦大事。則感應意也。（5 a）

此不思議境何法不收。此境發智何智不發。依此境發誓。乃至無法愛。何誓不具。何行不滿足耶。說時如上次第。行時一心中具一切心。（5 c）

⑭廣說者。總有十境。

開止觀爲十。一陰界入。二煩惱。三病患。四業相。五魔事。六禪定。七諸見。八增上慢。九二乘。十菩薩。

此十境通能覆障。陰在初者二義。一現前。二依經。(49 a) b)

若欲觀察。須伐其根。如灸病得穴。今當去丈就尺。去尺就寸。置色等四陰。但觀識陰。識陰者心是也。觀心具十法門。一觀不可思議境。二起慈悲心。三巧安止觀。四破法遍。五識通塞。六修道品。七對治助開。八知次位。九能安忍。十無法愛也。(52 a) b)

(16)夫一念心起即具十法界。十法界互具即百法界。一法界三十種世間即三千世間。三千只一念心。一念心是即三千。所以不縱不橫並不別名不可思議。

夫一心具十法界。一法界又具十法界百法界。一界具三十種世間。百法界即具三千種世間。此三千在一念心。若無心而已。介爾有心即具三千。亦不言一心在前。一切法在後。亦不言一切法在前。一心在後。例如八相遷物。物在相前。物不被遷。相在物前。亦不被遷。前亦不可。後亦不可。祇物論相遷。祇相遷論物。今心亦如是。若從一心生一切法者。此則是縱。若心一時含一切法者。此即是橫。縱亦不可。橫亦不可。祇心是一切法一切法是心。故非縱非橫。非一非異。玄妙深絕。非識所識。非言所言。所以稱爲不可思議境。意在於此。(54 a)

若隨便宜者。應言無明法法性生一切法。如眠法法心則有一切夢事。心與緣合則三種世間。三千相性皆從心起。一性雖少而不無。無明雖多而不有。何者指一爲多。多非多。指多爲一。一非少故。名此心爲不思議境也。(55 a)

三善巧安心者。善以止觀安於法性也。上深達不思議境淵奧微密。博運慈悲亘蓋若此。須行填願。行即止觀也。(56 b)

(19) 観無明癡惑本是法性。以癡迷故法性反作無明。起諸顛倒善不善等。如寒來結水變作堅冰。又如眼來反心有種種夢。今當體諸顛倒即是法性不一不異。雖顛倒起滅如旋火輪。不信顛倒起滅。唯信此心但是法性。起是法性起。滅是法性滅。体其實不起滅。妄謂起滅。只指妄想悉是法性。以法性繫法性。以法性念法性。常是法性無不法性時。體達既成。不得妄想。亦不得法性。還源反本法界俱寂。是名為止。如此止時。上來一切流轉皆止。觀者觀察無明之心等於法性。本来皆空平等。一切妄想善惡皆如虛空無二無別。譬如劫盡從地上至初禪炎無非是火。又如虛空藏菩薩所現之相一切皆空。如海惠初來所現一切皆水。介爾念起所念念者無不即空。空亦不可得。如前火木能使薪燃亦復自燃。法界洞朗咸皆大明。名之為觀。止只是智。智只是止。不動止只是不動智。不動智只是不動止。不動智照於法性。即是觀智得安。亦是止安。不動法性相應即是止安。亦是觀安。無二無別。

(20) 復次觀根塵相對一念心起。即空即假即中者。若根若塵並是法界也。並是畢竟空並是如來藏並是中道。云何即空。並從緣生。緣生即無主。無主即空。云何即假。無主而生即是假。云何即中。不出法性並皆即中。當知一念即空即假即中。並畢竟空並如來藏並是實相。非三而三。三而不三。非合非散。而空並如來藏並是實相。非三而三。三而不三。非合非散。而

無明癡惑本是法性。以癡迷故法性變作無明。起諸顛倒善不善等。如寒來結水變作堅冰。又如眼來反心有種種夢。今當體諸顛倒即是法性不一不異。雖顛倒起滅如旋火輪。不信顛倒起滅。唯信此心但是法性。起是法性起。滅是法性滅。體其實不起滅。妄謂起滅。祇指妄想悉是法性。以法性繫法性。以法性念法性。常是法性無不法性時。體達既成。不得妄想。亦不得法性。還源反本法界俱寂。是名為止。如此止時。上來一切流轉皆止。觀者觀察無明之心。上等於法性。本來皆空。下等一切妄想善惡。皆如虛空。無二無別。譬如劫盡從地上至初禪。炎無非是火。又如虛空藏菩薩所現之相。一切皆空。如海慧初來所現。一切皆水。介爾念起。所念念者無不即空。空亦不可得。如前火木能使薪燃。亦復自然。法界洞朗咸皆大明。名之為觀。止祇是智。智祇是止。不動止祇是不動智。不動智祇是不動止。不動智照於法性。即是觀智得安。亦是止安。不動於法性相應。即是止安。亦是觀安。無二無別。(56 b 3 c)

次根塵相對。一念心起即空即假即中者。若根若塵並是法界。並是畢竟空。並是如來藏。並是中道。云何即空。並從緣生。緣生即無主。無主即空。云何即假。無主而生即是假。云何即中。不出法性並皆即中。當知一念即空即假即中。並畢竟空。並如來藏。並實相。非三而三。三而不三。非合非散。而合而散。非非合非非散。不可一異。而一而異。譬如明鏡。明喻即空。像喻即假。鏡喻即中。不合不散。合散宛然。不一二

散、非非合也。非非散、不可一異而一而異。譬如明鏡。明喻即空像喻。即仮鏡喻即中。不合不散。散合宛然。不一二三三無妨。此一念仮不縱不橫不可思議。非但已爾。心仮及衆生亦復如是。華嚴云。心仮及衆生是三無差別。當知己矣。

②復次一心修止觀又二。一總明一心。二歷余一心。總者約無明一念心。此心具三諦。體達一觀此觀具三觀。前說一念無明與法性合即有一切百千夢事。一陰入界一切陰入界。無量單複具足無言等見。三界九地諸思。十六門破等一切諸法。先已次第橫豎聞竟。今聞一心因緣生法者。即懸超前來一切次第因緣生法。懸識不可思議因緣生法。前說諸法皆三假四句。四句求實不可得。單複諸見皆空。九地諸思皆空。十六門皆空。先已聞故。今聞一心即是空。懸超前來次第諸空。懸識不可思議畢竟妙空。前來所明諸仮。覆疎到入分別藥病授藥等法。先已聞故。今聞一心仮。懸起前來次第之仮。懸識雙照二諦之仮。今聞非空非仮者。懸超前來諸空非空諸仮非仮。又前來分別一切非有非無。單見中非有非無。複見中非有非無。具足中非非無。三藏中非有非無。通門非有非無。前已聞故。今聞非有非無。懸超前來諸非有非無。別門非有非無。前已聞故。此三諦一心中解者此人難得。何以故。約心論無明。還約心論因緣無生法。故有前來一切諸法。約心論無即空故有前來諸空。約心論仮故有前來出仮等。亦約心論法界

三。二三無妨。此一念心。不縱不橫不可思議。非但已爾。佛及衆生亦復如是。華嚴云。心佛及衆生。是三無差別。當知己具一切佛法矣。(8c\9a)

但一心修止觀。又爲二。一總明一心。二歷餘一心。總者。祇約無明一念心。此心具三諦。體達一觀。此觀具三觀。若不得前來橫豎諸說。如此境智何由可解。前說一念無明與法性合即有一切百千夢事。一陰界入一切陰界入。無量單複具足無言等見。三界九地一切諸思。十六門破等諸法。先已次第橫豎聞竟。今聞一心因緣生法者。即懸超前來一切次第因緣生法。懸識不可思議因緣生法。前說諸法皆三假四句。四句求實不可得。單複諸見皆空。九地諸思皆空。十六門皆空。先已聞故。今聞一心即是空。懸超前來次第諸空。懸識不可思議畢竟妙空。前來所明諸仮。覆疎到入分別藥病授藥等法。先已聞故。今聞一心即假。懸超前來次第之假。懸識雙照二諦之假。今聞非空非假者。懸超前來諸空皆非空。諸假皆非假。又前來分別一切非有非無。單見中非有非無。複見中非有非無。具足中非有非無。三藏中非有非無。通門非有非無。別門非有非無。前已聞故。今聞非有非無。懸超前來諸非有非無。別門非有非無。前已聞故。此三諦一心中解者。此人難得。何以故。約心論無明。還約心論因緣無生法。故有前來一切諸法。約心論無即空故有前來諸空。還約心論假故有前來出假等。亦約心論法界

中道非空非假。三諦具足只在一念心。分別相貌如次第說。若論道理只在一心即空即假即中。如一剎那而有三相。住移滅。一心三觀亦如是。生喻假有。滅喻空無。住喻非空非有。三諦不同而只一念。心如生住移滅只一剎那。即三觀三智三止三明例則可知。如是觀者即是衆生開佛知見。言衆生者貪恚癡心。皆計有我。我即衆生。我逐心起。心起三毒即名衆生。此心起時即空即假即中。隨心起念止觀具足。觀名佛知止觀。於念念中止觀現前。即是衆生開佛知見。此觀成就名初隨喜品。讀誦扶助此觀轉明成第二品。如行而說資心轉明成第三品。兼行六度功德轉深成第四品。正行六度事理無滅成第五品。転入六根清淨名相似位。故法華云。雖未得無漏而其意根清淨如此。從相似位進入銅輪。破無明得無生忍四十二地諸位。故法華云。得如是無漏清淨之果報。亦是三賢十聖住果報。喻佛一人居淨土。以賢聖例佛指妙覺是報。

<sup>②2</sup> 歷余一心者。若總無明心未必是宜。更歷余心。或欲心或嗔心或慢心此等心起即空即假即中。還如總中所說。無前來所說。但觀識陰作如此說。余四陰亦如是。十二入十八界亦如是。是名觀陰界入境。

<sup>②3</sup> 一煩惱境者。三毒卒不可控制。

故。有中道非空非假。三諦具足只在一心。分別相貌如次第說。若論道理。祇在一心即空即假即中。如一剎那而有三相。三相不同生住滅異。一心三觀亦如是。生喻假有。滅喻空無。住喻非空非有。三諦不同而祇一念。如生住滅異祇一剎那。三觀。三智。三止。三眼。例則可知。如是觀者。則是衆生開佛知見。言衆生者。貪恚癡心皆計有我。我即衆生。我逐心起。心起三毒。即名衆生。此心起時即空即假即中。隨心起念止觀具足。觀名佛知。止名佛見。於念念中止觀現前。即是衆生開佛知見。此觀成就名初隨喜品、讀誦扶助。此觀轉明成第二品。如行而說資心轉明成第三品。兼行六度。功德轉深成第四品。具行六度。事理無滅成第五品。第五品轉入六根清淨、名相似位。故法華云。雖未得無漏。而其意根清淨若此。從相似位進入銅輪。破無明得無生忍。四十二地諸位。故法華云。得如是無漏清淨之果報。亦是三賢十聖住果報。唯佛一人居淨土。以賢聖例佛。指妙覺是報。<sup>(84c)-(85a)</sup>

歷餘一心三觀者。若總無明心。未必是宜。更歷餘心。或欲心。瞋心。慢心。此等心起即空即假即中。還如總中所說。前來所說。但觀識陰作如此說。餘四陰亦如是。十二入。十八界。亦如是。是名觀陰界入境。破法遍竟。<sup>(85b)</sup>

第二觀煩惱境者。上陰界入不悟。則非其宜。而觀察不已。擊動煩惱。貪瞋發作。是時應捨陰入。觀於煩惱。前呵五欲。知其過罪。棄蓋是捨平常陰入。觀於果報於中求解。今觀發作隆

盛起重貪瞋。如鐵不與火合但黑。若與火合赫然。又報法尋常無時不有。呵棄爲易。若欵起煩惱控制則難。何者生來雖瞋諫曉則息。今所發者咆勃可畏。生來倒想乍起乍滅。今所發者鬱然不去。(102a)

#### 四大違返(49c)

(24)三病患境者。四大違反致有病生。

(25)四業境者。欲離生死諸業競起。

(26)五魔境者。恐出生死化他民屬魔用力制。

第三觀病患境者。夫有身即是病。四蛇性異。水火相違。鷗梟共棲。蟒鼠同穴。毒器重擔諸苦之藪。四國爲鄰更互侵毀。力均則暫和。乘虛則吞併。四大休否此喻可知。諸佛問訊法云。少病少惱。佛同人法。人既有病。權不得無。但言少耳。(106a)

第四觀業相境者。行人無量劫來所作善惡諸業。或已受報。或未受報。若平平運心相則不現。今修止觀能動諸業故。善惡相現。(111c)

第五觀魔事境者。行人修四三昧。惡將謝善欲生。魔恐逼出其境。又當化度於他。失我民屬。空我宮殿。又慮其得大神力大智慧力。復當與我興大戰諍。調伏控制觸惱於我。遽其未成。壞彼善根。故有魔事也。(114c)

二明發禪因緣者。大經云。一切衆生皆有初地味禪。若修不修必定當得。近情而望劫盡不修。久遠推之亦曾離蓋。譬以誦經。廢近則易習。廢久則難習。當知昔有次第習即次第發。乃至事修事發等。云云。如彼大地種類具足。得雨潤氣。各各開生。生亦前後。結果不俱。梅四。桃七。梨九。柿十。雨緣雖同。成實有異。宿習如種。止觀如雨。禪發如果熟參差。總言

八種耳。是名內因緣發也。(118 b)

禪有觀支。因生邪慧。逸觀於法。僻起諸倒。邪辯猛利。故次

(28)七見境者。逸觀諸法触境生見。

(29)八增上慢境者。得少事禪謂是無漏。

若識見爲非。息其妄著。貪瞋利鈍。二俱不起。無智者謂證涅槃。小乘亦有橫計四禪爲四果。大乘亦有魔來與記。並是未得謂得增上慢人。故次見說慢。(49 b)

(30)九二乘境者先世小習因靜而生。

(31)十菩薩境者。愛見大悲因之而起。

(32)如此一境即識是因緣生心。還以即空即假即中觀觀之。如前陰境略說。元不隔凡成聖。

又觀此禪。因緣生法即空即假即中。十法界從禪而生。從禪而滅。(130 c)

此六即者。始凡終聖。始凡故除疑怯。終聖故除慢大。(10 b)此十種境。始自凡夫正報。終至聖人方便。(49 c)此之止觀。天台智者。說己心中所行法門。(1 b)

如此解釋。本於觀心。實非讀經安置次比。爲避人嫌疑。爲增長信。幸與修多羅合故引爲證耳。(26 b)

(33)故大師傷歎曰。說己心中所行法門復与修多羅合。而人皆不肯服。韻高無和寡。吾甚傷之。

天台伝南岳心要畢

(寛文三年三月吉祥日  
長谷川市郎兵衛開板)

夫世間醫藥。費財用工。又苦澁難服。多諸禁忌。將養惜命者。死計將餌。今無一文之費。不廢半日之功。無苦口之憂。恣意飲噉。而人皆不肯行之。庸者不別貨。韻高和寡。吾甚傷之。(109 b s c)

①題名の「天台伝南岳心要」は、⑤の文に記す「天台智者伝

南岳惠思大師円頓止觀」の意である。『摩訶止觀』では「天台伝南岳三種止觀」と記されている。「天台は南岳より三

種の止觀（漸次・不定・円頓）を伝えたもう」と読まれるよ

うに、「天台伝南岳心要」の題名も、「天台智顗が南岳慧思

から伝えた『摩訶止觀』（円頓止觀）の「心要」という意味に

読むべきである。したがつて『漢光類聚』卷一冒頭に出る

「天台伝南岳心要」の文点について、「天台の伝ふる南岳の「心要」と訓読する蓮実房勝範の読み方も、「天台に南岳の心要を伝ふ」と読む故阿闍梨（中島長豪か）の読み方も、その後に続く諸釈も、見当違いもはなはだしいものといわなければならない。すなわちいわれるような「南岳の心要」のではなく、南岳慧思から受けた天台智顗の「『摩訶止觀』の心要」という意味に解すべきである。なぜなら本文はすべて『摩訶止觀』からの抄略文で構成されているからである。

②この間の文は、灌頂が記す序王（略説縁起）の末尾の一段に  
出る文意を要約したものである。

但し、同句は、名字即の段（10b）にもみえる。

疑う者はいわく、「諸法は寂滅の相なり。言をもって宣ぶべからず。『大經』にいわく、「生生不可説、ないし不生不生不可説」と。もしは通、もしさ別、言語の道は断え、能説なく、所説なし。身子はいわく、「吾れ聞く、解脱の中には言

説あることなしと、ゆえに吾れはここにおいていうところを知らず」と。『淨名』にいわく、「その所説は説なく示なし。その聽法は聞く得なし」と。この人は説く能わず、この法は説くべからず、しかも人に示すといわんや」と。

次の答の文も、同じ章段に出る文で合成している。

③答の冒頭の一句のみは、常坐三昧の段に出る次のような文から取つたのであろう。

意の止觀は、端坐して正念す。惡覺を蠲除し、諸の亂想を捨て、思惟を離えることなく、相貌を取らず、ただ専ら縁を法界に繋け、念を法界に一つにす。繫縁はこれ止、一念はこれ觀なり。一切の法はみなこれ仏法なりと信じて、前なく後なく、また際畔なく、知る者なく説く者なし。もし知ることなく説くことなれば、すなわち有にあらず無にあらず、知る者にあらず知らざる者にあらず、この二邊を離れて無所住に住し、諸仏の住するがごとく、寂滅の法界に安處す。この深法を聞いて驚怖を生ずることなけれ。この法界をまた菩提と名づけ、また不可思議の境界と名づけ、また般若と名づけ、また不生不滅と名づく。このごとき等の一切の法は法界と二なく別なし。二なく別なしと聞いて疑惑を生ずることなけれ。

④この一文は、②の文の段の結文に出る、次のような文とその意趣を要約したものである。

もし説・黙を競わば、教の意を解せず、理を去ることいよ

いよ遠し。説を離れて理なく、理を離れて説なし。説に即して説なく、説なきに即して説くなり。「なく別なく、事に即して真なり。大悲は一切の無聞を憐愍したもう。月が重山に隠るれば、扇を挙げてこれに類し、風が太虚に息めば、樹を動かしてこれを訓えるがごとし。今の人は意鈍にして玄覧することすなわち難し、眼は色に依つて入る。文を仮りればすなわち易し。もし文に封ぜられて害をなせば、すべからく文は非文なることを知りて、一切の文・非文・非不文に達し、よく一文において一切の解を得べし。この義のためのゆえに三種の文をもつて一に達するの門となすなり。すでに略して縁起を説き竟る。

「故以文示之」以下はこの一段の要旨を要約している。「文字即解脱」以下の説は、直前に引証している『維摩經』の「文字の性を離る、すなわちこれ解脱なり」の文意に重ねて要約したものと判ぜられる。

⑤この文が題名と直結する意味を開示する。「天台智者伝南・岳惠思大師」の「円頓止觀」の心要を二分して示すという意味である。『摩訶止觀』の原文は次のようにある。

天台は南岳より三種の止觀を伝えたもう。一つには漸次、二つには不定、三つには円頓なり。みなこれ大乘にして、ともに實相を縁じ、同じく止觀と名づく。

また「分一。先略。次広」とする構成法は、必ずしも抄略文の出所はその通りではないが、大体において『摩訶止

觀』の「五略十広」の構成法を承けたものといえる。  
⑥「円頓者」で始まる「円頓章」の文を、『心要』では「略者」で始め、同文を用いている。

円頓は、初めより実相を縁ず、境に造るにすなわち中にして、真実ならざるはなし。縁を法界に繋け、念を法界に一うす、一色一香も中道にあらざることなし。己界および仏界、衆生界もまたしかり。陰入みな如なれば苦として捨つべきなく、無明塵勞すなわちこれ菩提なれば集として断すべきなく、辺邪みな中正なれば道として修すべきなく、生死すなわち涅槃なれば滅として証すべきなし。苦なく集なきがゆえに世間なく、道なく滅なきがゆえに出世間なし。純一の実相にして、実相の外にさらに別の法なし。法性の寂然なるを止と名づけ、寂にして常に照らすを觀と名づく。初後をいうといえども「なく別なし。これを円頓止觀と名づく。

この文は灌頂の序王に出る有名な文章であるが、『心要』はこれを『摩訶止觀』の心要の略文として掲げていることが知られる。

⑦⑥の文に続く灌頂の文で、「こ（円頓）の菩薩は、円の法を聞き、円の信を起し、円の行を立て、円の位に住し、円の功德をもつてみずから莊嚴し、円の力用をもちいて衆生を建立す」と記し、その一を説明する最初の段に出る次のような文から抄出している。

いかんが円の法を聞くや。生死はすなわち法身、煩惱はす

なわち般若、結業はすなわち解脱なりと聞くなり。三の名ありといえども三の体なし。これ一体なりといえども三の名を立つ。この三はすなわち一相なり、その実は異なりあることなし。法身が究竟すれば、般若・解脱もまた究竟す。般若が清浄なれば、余もまた清浄なり。解脱が自在なれば、余もまた自在なり。一切の法を聞くこともまたこのごとし。みな仏法を具して減少するところなし。これを円の法を聞くと名づく。

(8) この文は『摩訶止観』卷七で「陰入界境」について「十乘觀法」を説き終った所で説かれる。本来、端坐と歴縁対境は一組のものとして説かれているが『心要』は端坐の方は略している。

端坐して陰入を観することは上に説くことし。

縁に歴て境に対して陰・界を観すれば、縁はいわく六作なり、境はいわく六塵なり。『大論』にいわく、「縁において作者を生じ、塵において受者を生ず」と。

文中に出る「一心三觀」はここに突然、現われるが、それがどのようなものかは何も説明されない。廣説の段で詳細に説かれるから、ここではそれの見出しがらいの意味で出し、いわば天台止観の自明の言葉として用いているのであらう。

「如來行」は次のような文を想定していると思われる。

円の観は、「正直に方便を捨てて、ただ無上の道を説く」

抄略文からみた『天台伝南岳心要』(池田)

「ただこの一事のみ實にして、余の二はすなわち真にあらず」「最実の事を説く」、これを教の実と名づく。「如來の行を行じ」「如來の室に入り衣・座」等は、また一行あればこれ如來の行なれば、これを行の実と名づく。見るところの中道はすなわち一究竟にして、如來が得るところの法身に同じく、異なることなく別なることなし、これを証の実と名づく。

(9) 「一心三觀」と「慈悲」は表裏をなしており、「四弘誓願」が四諦の理に依って発ることを明す。これは『摩訶止観』の大意章(五略)の発心の段で、「是を頭やすにさらに、三となす。初めに四諦。次に四弘。後に六即なり。」と示す、「是の発心」(正しい発心)を示す立場を踏襲するのであろう。

また、「無縁慈悲」は、破法遍の段に出る次のような文を踏えるのであろう。

二つに、中觀を修する因縁は、略して五となす。一つには無縁の慈悲のためなり、二つには弘き誓願を満たし、三つには仮の智慧を求める、四つには大方便を学び、五つには牢強の精進を修するなり。

一つに無縁の慈悲とは、すなわち如來の慈悲なり。この慈悲は実相と同體にして、衆生の相を取らざるがゆえに愛見にあらず、涅槃の相を取らざるがゆえに空寂にあらず。空寂にあらざるがゆえに法縁の慈悲にあらず、愛見にあらざるがゆえに衆生縁にあらず。二邊の相なきがゆえに無縁と名づく。

(中略) 二つに本の弘誓を満ずるとは、初發心の時、四弘誓

を起すこと虚空と等し。空・仮の両観が苦を知り集を断ずるは、なお枝葉のごとく、いまだ断ずることを知らざることころは、喻えれば根本のごとし。空・仮の両観が道を修し滅を証するは、なお灯炬が諸山の幽闇に力めるも明らかにすること能わざるがごとし。両観を修すといえども、誓願はいまだ満せず、譬えれば百川も海を溢たすこと能わざるがごとし。娑伽羅龍王が霪ぐところの泉池は一たび霪げばすなわち満つ、中道の正觀もまたまたこのごとし、一切の苦を知り、法界の集を断じ、無上の道を修し、究竟の滅を証す。本願を満ぜんがためのゆえに、すべからく第三の観を修すべし。

⑩「真正菩提心」と結ぶところから、十乘觀法の第二発真正菩提心（起慈悲心）に出る次のような文を想定するのであらう。

二つに、真正の菩提心を發すとは、すでに深く不思議の境を識りて、一苦は一切苦なるを知り、みずから昔の苦を悲しむ。（中略）すなわち大悲を起し、両の誓願を興す、衆生無辯誓願度、煩惱無數誓願断なり。衆生は虚空のごとしといえども、空のことき衆生を度さんことを誓う、煩惱は所有なしと知るといえども、所有なき煩惱を断ぜんことを誓うなり。（中略）大慈を起し両の誓願を興す、いわく法門無量誓願知、無上仏道誓願成なり。法門は永く寂なること空のごとしと知るといえども、永寂を修行せんと誓願す、菩提は所有なしと知るといえども、所有なき中に吾れは故らにこれを求むなり。

勿論、五略段でも、「このゆえに大慈悲を起し、四弘誓を

興し、両の苦を抜き両の樂を与う。ゆえに非縛非脱にして真正の菩提心を發すと名づく。前の三はみな四諦に約して語をなす。今は法藏・塵勞・三昧・波羅蜜に約す。その義は宛然なり」（九頁中）などの文がみえる。ただし『止觀大意』（大正藏四六卷四五九頁中）に、衆生無辯誓願度。依苦諦境。煩惱無數誓願断。依集諦境。法門無尽誓願知。依道諦境。仏道無上誓願成。依滅諦境」と同文がみえる。四弘誓願については、早く『次第禪門』（大正藏四六卷四七六頁中）の中で、次のようにまとまつた説がみられる。

菩提心者。即是菩薩。以中道正觀。以諸法實相。憐愍一切。起大悲心。發四弘誓願。四弘誓願者。一未者令度。亦云。衆生無辯誓願度。二未解者令解。亦云。煩惱無數誓願断。三未安者令安。亦云。法門無尽誓願知。四未得涅槃令得涅槃。亦云。無上仏道誓願成。此之四法。即対四諦。故縷絡經云。未度苦諦令度苦諦。未解集諦令解集諦。未安道諦令安道諦。未証滅諦令証滅諦。（以下略）⑩ここは「六即に約して是（正しい発心）を顯わす」段の次のような文の主旨を要約したものである。

六即に約して是を顯わせば、初心を是とせんや、後心を是とせんや。答う。『論』の焦炷のごとく、初めにあらずして初めを離れず、後にあらずして後を離れざるなり。もし智と信と具足して、一念すなわちはなりと聞けば、信のゆえに誇

らず、智のゆえに懼れず、初めも後もみな是なり。もし信なければ高く聖境を推して己れの智分にあらずとし、もし智なれば増上慢を起して己れは仏に均しとおもう、初めも後もともに非なり。このことのためのゆえに、すべからく六即を知るべし。いわく理即・名字即・觀行即・相似即・分真即・究竟即なり。この六即は凡に始まり聖に終る、凡に始まるゆえに疑怯を除き、聖に終るゆえに慢大を除く。云々。理即とは、一念の心すなわち如來藏の理なり。如のゆえに即空、藏のゆえに即假、理のゆえに即中なり。三智は一心の中に具わり不可思議なり。上に説くがごとし。三諦は一諦にして三にあらず一にあらざるなり。一色も一香も一切の法を具え、一切の心もまたまたこのごとし。これを理即の是の菩提心と名づく。またこれ理即の止觀なり。即寂を止と名づけ、即照を觀と名づく。(以下略)問う。『釈論』の五菩提の意はいかん。

答う。『論』は堅に別の位を判じ、今は堅に円の位を判す。

これを会すれば、發心は名字に対し、伏心は觀行に対し、明心は相似に対し、出到は分真に対し、無上は究竟に対す。またかの名を用いて円の位に名づければ、發心はこれ十住、伏心はこれ十行なり。

「六即六仏」は、「六即」を『大智度論』の「五菩提」の説と

重ねて解する説を要約したものと解することができる。

「初中後皆是。六故簡濫」は、『止觀大意』(大正藏四六卷四五九頁下)に「即故初後俱是。六故初後不濫」とある表現が一番近い。「濫」字は、『心要』の原文は『監』に作る

が改めた。

(12)五略段の「非(間違った発心)」を簡ぶ段で、「感應道交の発心」を示す個所に出る次の文を抄出する。「論」は『中論』の文である。

『論』にいわく、真法および説者、聽衆は得ること難きがゆえに」と。このごときはすなわち、生死は有の辺にあらず、無の辺にあらず、実相は難にあらず易にあらず、有にあらず無にあらず、これを真法と名づく。よくこのごとく説き聽くを、眞の説・聽と名づく。三悉檀の益あるを有の辺と名づけ、第一義の益を、有の辺にあらず無の辺にあらずと名づく。ゆえに知んぬ、縁起がよく大事を弁ずるはすなわち感應の意なり。

(13)十乘觀法の第一觀心是不思議境の段の最後を結ぶ、次の文によつている。

この不思議の境になんの法をか收めざらん、この境が智を發するになんの智をか發せざらん、この境に依りて誓いを發し、ないし法愛なし、なんの誓いか具せざらん、なんの行か満足せざらんや。説く時は上の次第のごとくなるも、行ずる時は一心の中に一切の心を具するなり。云々。

(14)以下の「廣説」では、「十境」を大枠に立ててゐるが、「十乘觀法」の枠組は伏せて明示していない。「正修行章では次のように示す。

止觀を開いて十となす。一つには陰界入、二つには煩惱、

三つには病患、四つには業相、五つには魔事、六つには禪定、七つには諸見、八つには増上慢、九つには二乘、十には菩薩なり。

この十境は通じてよく覆障すれども、陰が初めにあるは二義なり。一つには現前、二つには經に依る。

(15) 三科（十八界・十二処・五陰）を揃境して、識陰を探り出す、次のような文を想定している。

もし観察せんと欲すれば、すべからくその根を伐るべし、病を灸するに穴を得るがごとくすべし。今まさに丈を去つて尺に就き、尺を去つて寸に就くべく、色等の四陰を置いて、ただ識陰を観すべし。識陰とは心これなり。

心を観ずるに十の法門を具す。一つには觀不可思議境、二つには起慈悲心、三つには巧安止觀、四つには破法遍、五つには識通塞、六つには修道品、七つには対治助開、八つには知次位、九つには能安忍、十には無法愛なり。

文中で明らかに、「識陰とは心これなり」と定めた後で、その心を「十乘觀法」の一について順次観察していくのであり、先ず第一に「觀心是不可思議境」として示しているのであるが、『心要』は敢えて「十乘觀法」の組織を伏せていることが知られる。

(16) 「觀心是不思議境」に出る次の一段の文の抄略文である。

それ一心に十の法界を具す。一つの法界にまた十の法界を具すれば百の法界なり。一つの界に三十種の世間を具し、百

の法界にすなわち三千種の世間を具す。この三千は一念の心にあり。もし心なくんばやみなん、介爾も心あればすなわち三千を具す。また、一心は前にあり、一切の法は後にありといわざ、また、一切の法は前にあり、一心は後にありといわざ。例えば、八相に物が遷るがごとし、物が相の前にあれば物は遷されず、相が物の前にあればまた遷されず、前もまた不可なり、後もまた不可なり、ただ物に相が遷るを論じ、ただ相が遷るに物を論ずるのみなり。今の心もまたこのごとし。もし一心より一切の法を生ずれば、これはすなわちこれ縦なり、もし心が一時に一切の法を含めば、これはすなわちこれ横なり、縦もまた不可なり、横もまた不可なり。ただ心がこれ一切の法、一切の法がこれ心なるのみ。ゆえに縦にもあらず横にもあらず、一にもあらず異にもあらず、玄妙にして深絶なり。識が識るところにあらず、言がいうところにあらず、所以に称して不可思議の境となす、意はここにあるなり。云々。

(17) この一句も「觀心是不思議境」段に次のように出る。校訂(4)の指摘は「性諸法」を「生諸法」に改めるという意味であろう。原文にある(4)は三字下の「性」字の傍に移さなければいけない。

もし便宜に随えば、まさに無明は法性に法つて一切の法を生ずといふべし。眠法が心に法つてすなわち一切の夢事があるがごとし。心と縁と合すればすなわち三種の世間あり、三千の相性はみな心より起るなり。一性は少なりといえどもし

かもなきにはあらず、無明は多なりといえどもしかもあるにはあらざるなり。なんとなれば、一を指して多となせば、多は多にあらず、多を指して一となせば、一は少にあらざるがゆえに、この心を名づけて不思議の境となすなり。

(18) 十乘觀法の第三善巧安心に、次のように出る文の抄出。

三つに、善巧安心は、善く止觀をもつて法性に安んずるなり。上に深く不思議の境の淵奥にして微密なるに達し、博く慈悲を運らして亘蓋することはこのごとし。すべからく行をもつて願を填つべし、行とはすなわち止觀なり。

(19) 以下の長文は、前の句を承ける「善巧安心」の段に出る次のような長文をそつくり抄出する。

無明の癡惑も本はこれ法性なり、癡迷をもつてのゆえに、法性は変じて無明となり、諸の顛倒せる善・不善等を起す。

寒が來たつて水を結び、変じて堅い氷となるがごとく、また眠が來たつて心を変じ、種種の夢あるがごとし。今まさに諸の顛倒はすなわちこれ法性にして一ならず異ならずと体すべし。顛倒が起滅することは旋火輪のごとしといえども、顛倒の起滅を信じず、ただ、この心はただこれ法性なり、起はこれ法性の起、滅はこれ法性の滅なりと信ず。それを体すれば実に起滅せざるを妄りに起滅すとおもうなり。ただ妄想を指すことごとくこれ法性なり、法性をもつて法性にして法性ならざる時はなし。体達すでに成すれば妄想を得ず、また法性を得ず、源に還り本に反つて、法界はともに寂なり、これを名

づけて止止となす。このごとく止める時、上来の一切の流転はみな止む。

観は、無明の心は上は法性に等しく、本来みな空なり、下は一切の妄想の善惡に等しく、みな虚空のごとく二なく別なしと觀察するなり。譬えば、劫が尽きるとき地より上は初禪に至るまで、炎炎としてこれ火にあらざることなきがごとく、また、虛空藏菩薩が現ずるところの相は一切みな空なるがごとく、海慧が初めて來たつて現ずるところは一切がみな水なるがごとし。介爾の念が起るに、所念の念は即空ならずといふことなく、空もまた不可得なり。火を前める木がよく薪を然えしめ、またまたみずから然えるがごとし。法界は洞朗としてことごとくみな大いに明らかなり、これを名づけて観となす。

止はただこれ智、智はただこれ止なり、不動の止はただこれ不動の智、不動の智はただこれ不動の止なり、不動の智は法性を照らせば、すなわちこれ観智が安することを得て、またこれは止が安ずるなり、不動なること法性において相応し、すなわちこれ止が安んずるなり、またこれ観が安ずるなり、二なく別なし。

(20) 五略段の「四弘誓願に約して是（正しい発心）を顯わす」段に出る次の文をそつくり抄出する。

次に、根・塵があい対して一念の心が起るに即空・即仮・即中なれば、もしは根、もしは塵もならびにこれ法界、ならびにこれ畢竟空、ならびにこれ如來藏、ならびにこれ中道な

り。いかんが即空なるや。ならびに縁より生ず、縁より生ずればすなわち主なし、主なればすなわち空なり。いかんが即仮なるや。主なくしてしかも生ず、すなわちこれ仮なり。いかんが即中なるや。法性を出でず、ならびにみなすなわち中なり。まさに知るべし、一念は即空・即仮・即中にして、ならびに畢竟空、ならびに如来藏、ならびに実相なることを。三にあらずしてしかも三、三にしてしかも三にあらず、合にあらず散にあらず、しかも合、しかも散、合にあらざるにあらず、散にあらざるにあらず、一・異なるべからず、しかも一、しかも異なり。譬えば明鏡のごとし。明は即空に喻え、像は即仮に喻え、鏡は即中に喻う。合せず、散せず、合・散は宛然なり。一、二、三にあらずして、二、三も妨げなし。この一念の心は縱ならず、横ならず、不可思議なり。ただ己れのみしかるにあらず、仏および衆生もまたこのごとし。『華嚴』にいわく、「心も仏もおよび衆生も、この三は差別なし」と。まさに知るべし、己心に一切の仏法を具すといふことを。

(2)以下の長文は、十乘觀法の第四破法遍の、「横と堅の不二で破す」段に入る文の抄出。

ただ一心に止觀を修するに、また二とす。一つには總じて一心を明かし、二つには余の一心に歴るなり。

總じてとはただ無明の一念の心に約す。この心は三諦を具え、一觀を体達すれば、この觀に三觀を具う。もし前來の横堅の諸説を得ざればこのごとき境・智をなにに由つて解すべ

きや。前には一念の無明と法性と合してすなわち一切の百千の夢事あり、一の陰界入は一切の陰界入にして、無量の單・複・具足・無言等の見、三界九地の一切の諸思、十六門をもつて破する等の諸法あることを説き、先にすでに次第の横・堅を聞き竟る。今は一心の因縁生の法を聞けば、すなわち懸かに前來の一切の次第の因縁生の法を超え、懸かに不可思議の因縁生の法を識るなり。前には諸法はみな三仮の四句あり、句句に實を求めるも不可得にして、單・複の諸見もみな空なり、九地の諸思もみな空なることを説き、先にすでに聞くゆえに、今は一心はすなわちこれ空なりと聞けば、懸かに前來の次第の諸空を超え、懸かに不可思議の畢竟の妙空を識るなり。前來に明かすところの諸の仮は覆疎し倒入して、藥・病・授藥等の法を分別することを先にすでに聞くゆえに、今は一心はすなわち仮なりと聞けば、懸かに前來の次第の仮を超え、懸かに双照の二諦の仮を識るなり。今は非空非仮を聞けば、懸かに前來の諸の空はみな空にあらず、諸の仮はみな仮にあらざるに超え、また前來の一切の非有非無、單の見の中の非有非無、複の見の中の非有非無、具足の中の非有非無、三藏の中の非有非無、通門の非有非無、別門の非有非無を分別するを、前にすでに聞くがゆえに、今は非有非無を聞けば、懸かに前來の諸の非有非無を超えて、懸かに中道の不可思議の非有非無を識るなり。このごとく三諦を一心の中に解する者は、この人を得ること難し。なにをもってのゆえぞ、心に約して無明を論じ、還つて心に約して因縁所生の法を論ずるがゆえに前來の一切の法あ

り。心に約して即空なるがゆえに前來の諸の空あり。還つて心に約して仮を論するがゆえに前來の出仮等あり。また心に約して法界を論するがゆえに中道の非空非仮あり、三諦を具足してただ一心にあり、相貌を分別すれば次第に説くがごとし、もし道理を論すればただ一心にありて即空・即仮・即中なり。一刹那にしてしかも三相あり、三相は不同にして生・住・滅の異なりあるがごとし。一心三觀もまたこのごとし。

生は仮有に喻え、滅は空無に喻え、住は非空非有に喻う。三諦は不同なれども、しかもただ一念なり、生・住・滅は異なるれどもただ一刹那なるがごとし。三觀・三智・三止・三眼も例してすなわち知るべし。

このごとく觀すれば、すなわち衆生が仏の知見を開くなり。衆生といふは、貪・恚・癡の心がみな我ありと計す、我はすなわち衆生なり、我は心を逐うて起り、心に三毒を起すをすなわち衆生と名づく。この心が起る時、即空・即仮・即中なり。心に隨い念を起せば止觀を具足す、觀は仏の知と名づけ、止は仏の見と名づけ、念念の中において止觀が現前すれば、すなわちこれ衆生が仏の知見を開くなり。この觀が成就するを初めの隨喜品と名づけ、読誦をもつて扶助すればこの觀は転た明らかにして第二の品を成し、行のごとくにして説けば、心を資けること転た明らかにして第三の品を成し、兼ねて六度を行すれば功徳は転た深くして第四の品を成し、具さに六度を行すれば事・理は滅することなく第五の品を成し、第五の品が転じて六根清淨に入るを相似の位と名づく。ゆえに『法華』にいわく、「いまだ無漏を得ずといえども、

しかもその意根が清浄なることはこのごとし」と。相似の位より進んで銅輪に入り、無明を破して無生忍を得るに四十二地の諸位あり。ゆえに『法華』にいわく、「このごとき無漏の清浄の果報を得る」と。またこれ「三賢、十聖は果報に住し、ただ仏のみ一人、淨土に居したもう」なり、賢・聖をもつて仏に例すれば、妙覺はこれ報を指す。

文中で明らかなように「生・住・滅の異」を『心要』は「生住移滅」と記していることがわかる。

(22)前の「一總明一心」を承ける、次の「一歷余一心」の文を抄出。破法遍の説明はここで終る。

余に歴る一心三觀は、もし總の無明の心がいまだ必ずしもこれ宜しからざれば、さらに余の心に歴るなり。あるいは欲心、瞋心、慢心の、これ等の心が起るも即空・即仮・即中なり、還つて總の中に説くところのごとし。云々。

前年の所説は、ただ識陰を観じてこのごとき説をなす。余の四陰もまたこのごとし、十二入、十八界もまたこのごとし、これを陰界入の境を観すと名づく。破法遍を竟る。

(23)この煩惱境以下の諸境の解説文も、『摩訶止觀』の当該の各段の解説文にそるものである。

第二に煩惱の境を観ずるは、上の陰界入を悟らざればすなわちその宜しきにあらず、しかも觀察することやまざれば、煩惱を擊動し、貪・瞋を發作す。この時はまさに陰入を捨て煩惱を観すべし。

前に五欲を呵するはその過罪を知り、棄蓋はこれ平常の陰

入を捨て、果報を観する中において解を求む。今は發作すること隆盛にして重き貪・瞋を起すことを観ずるなり。鉄は火と合せざればただ黒く、もし火と合すれば赫然たるがごとし。また、報法は尋常にして時としてあらざることなけれ

ば、呵し、棄てることは易しとなすも、もし欲に起る煩惱は控制することすなわち難し。なんとなれば生來、瞋るといえども諫曉すればすなわち息むも、今、發するところの者は咆勃として畏るべし。生來の倒想は乍ち發り乍ち滅するも、今、發するところの者は鬱然として去らず。

(24) 十境の互発を説く段に「四大違返」の成句がみえるので、この語を使って、病患境の次のような文意に重ねているのであろう。

第三に病患の境を觀ずるは、それ身があればすなわちこれ病むなり。四蛇の性は異にして、水と火の相が違い、鴟と梟が棲を共にし、蟠と鼠が穴を同じくし、毒器、重担にして、諸苦の藪なり。四国が隣をなして更互に侵毀し、力が均しければすなわち暫く和し、虚に乗ずるときはすなわち呑併す。四大の休否もこれに喻えて知るべし。諸仏の問訊の法に、「少病少惱なりや」というは、仏が人の法に同じしたものなり、人はすでに病あり、権りにもなきことを得ざれば、ただ「少なきや」というのみ。

(25) 業相境に出る次のような文の要約である。

第四に、業相の境を觀するは、行人が無量劫よりこのかた作るところの善惡の諸の業は、あるいはすでに報を受ける

も、あるいはいまだ報を受けざるも、もし平平の運心には相すなわち現ぜざれども、今、止觀を修するに、よく諸業を動ずるがゆえに、善惡の相が現ずるなり。

#### (26) 魔事境の次のような文の要約。

第五に、魔事の境を觀ずるは、行人が四の三昧を修して、惡がまさに謝せんとし、善が生ぜんと欲するに、魔が迺かにその境を出ることを恐れ、また、まさに他を化度して我が民属を失い、我が宮殿を空しからしむべし、また、その大神力と大智慧力を得て、また、まさに我れと大戰諍を興し、調伏し控制して我れを触惱すべしと慮り、そのいまだ成せざるに遠んで、彼れの善根を壞すがゆえに、魔事があるなり。

(27) 禅定境の次のような文の要約。「事禅」とは禅定境で取り上げる(1)根本四禪、(2)十六特勝、(3)通明禪、(4)九想、(5)八背捨、(6)大不淨、(7)慈心、(8)因縁、(9)念佛、(10)神通の諸禅のこと。

二つに、禪を發する因縁を明かせば、『大經』にいわく、一切の衆生にみな初地の味禪あり、もしさ修するも修せざるも、必定してまさに得べし」と。近情をもって望めば、劫が尽きるも修せず、久遠をもって、これを推せば、またかつて蓋を離る。譬えば、誦經をもってすれば、廢することが近ければすなわち習い易く、廢することが久しければすなわち習い難し。まさに知るべし、昔に次第に習うことあればすなわち次第に發し、ないし事を修するは事を發する等なり。云々。かの大地が種の類を具足して、雨の潤り氣を得て、おのおの

開生し、生ずることもまた前後して、果を結ぶことも俱なら

ず、梅は四、桃は七、梨は九、柿は十にして、雨の縁は同じ  
といえども実を成することは異なりあるがごとし。宿習は種  
のごとく、止観は雨のごとく、禪が発するは果が熟すること  
が差なるがごとし。総じて八種をいうのみ。これを内の因縁  
が発すと名づけるなり。

(28) 十境の生起の段に出る諸見境の次のような説明文を抄出。

禪に觀支あり、因りて邪慧を生じ、逸に法を觀じ、僻えに諸  
倒を起し、邪弁は猛利なり。ゆえに禪に次いで見を説くなり。

(29) 前と同じく、増上慢境の次のような説明文の要約。

もし見を識りて非となせば、その妄著を息め、貪・瞋の利  
・鈍は二つともに起らざるも、無智の者は涅槃を証すとい  
う。小乗にもまた横に四禪を計して四果となすことあり、大  
乗にもまた魔が來たり記を与えることあり、ならびにこれい  
まだ得ざるを得たりという増上慢の人なり。ゆえに見に次い  
で慢を説くなり。

(30) 前と同じく、一一乗境の次のようない説明文から引用。

見と慢とすでに静まれば、先世の小習が靜に因りて生ず、  
身子が眼を捨てるはすなわちその事なり。(中略) ゆえに慢  
に次いで二乗を説くなり。

(31) 十乘觀法の第一起慈悲心の段に、「もし偏えに衆生の度す  
べきを見れば、すなわち愛見の大悲に墮して解脱の道にあ  
らざるなり」と出、諸見境の真偽を決する段に、「慈悲を  
起すといえども、愛見の悲なるのみ」と出る文意を要約し

たのである。

(32) 「前の陰境で略説せるが如し」とあるから、前文の意は(21)  
段に出るような三諦三觀の觀法を一一の境でも適用すると  
いう意であるが、よりまとまった表現を探すと、禪定境の  
止観を修する段で、次のように記されている。

また、この禪を觀するに、因縁より生ずる法は、即空・即  
仮・即中なり。十法界の禪に従つて生じ、禪に従つて滅す。

「元不隔凡成聖」(元より凡を隔てず聖を成す)の句は、原  
本には「元不隔元成聖」とあり、これを「無不隔凡聖」と  
校訂しているが、今はこのように改めた。この文も恐らく  
は、六即の段に出る「この六即は凡に始まり聖に終る、凡  
に始まるゆえに疑怯を除き、聖に終るゆえに慢大を除く」  
という文や、「十境の生起」を結ぶ、次のような文の抄略  
であろう。

この十種の境は、始め凡夫の正報より、終り聖人の方便に  
至る。

(33) 「故に大師は傷歎して曰く」以下の文は、次のような三個  
所に出る文で合成している。「説己心中所行法門」の句は、  
灌頂の序文に、

この止観は天台智者が己心中に行せしところの法門を説き  
たもう。

と出、「与修多羅合」の句は、第三顯体章の段に、

んで次比を安置するものにあらず、人の嫌疑を避けんがために、信を增長せしめんがために、幸いに修多羅と合せるを故に引いて証となすのみ。

と出、「而人皆不肯服」以下の文は、病患境の段に、

それ世間の医薬は、財を費やし、工を用い、また苦渋にして服し難く、諸の禁忌も多し。まさに命を養い惜しむ者は、死ぬまで計してまさに餌わん。今は一文の費もなく、半日の功を廢せず、口に苦きの憂いもなく、意を恣にして飲噉す、しかれども人はみなこれを行ずることを肯わず、庸者は貨を別えざるなり。韻高ければ和するものは寡なし、吾れははなはだこれを傷めり。

と出る文から取つてある。

以上で考察したように、『心要』は最初から最後まで、『摩訶止観』から抄出した文章をつなぎ合わせて作ったものであることが判明する。したがつて『心要』の「天台伝南岳心要」という題名の意味も、従来考えられて来たような「天台が伝えた南岳の心要」とか、「天台に南岳の心要を伝える」とかという意味ではなく、「天台智顗の『摩訶止観』の心要」という意味に解すべきであろう。「南岳の心要」などでは断じてないのである。

次に、『心要』に採られた『摩訶止観』の文章がどの個所に出ているのか一覽してみると、さらに興味深い問題が明らかになる。拙著（『詳解摩訶止観』定本訓読篇・天卷・一九

九年七月・大蔵出版）の目次を利用して、『摩訶止観』全体の内容構成にもとづいてその状況を明示してみると、次のようなになる。

### 卷第一（の上）

#### 序 文

#### 通 序

#### 別 序

##### 一 金口の祖承

##### 二 今師の祖承

##### 1 三種の止観

##### 2 その文証

##### 3 三種の著述

③

①  
⑤  
⑥

②  
④  
⑦

#### 正 説

##### 一 標

##### 二 生

##### 三 分

##### 四 料

##### 五 広

##### 簡 釈（十広）

#### 第一章 大 意（五略）

#### 第一節 発 大 心

#### 第一項 発心の語義

## 第二項 非を簡ぶ⑤

第三項 是を顯わす

1 四諦に約す

## 卷第一（の下）

2 四弘誓願に約す

3 六即に約す

## 卷第一（の上）

第二節 修大行

第一項 四種三昧

1 常坐三昧

2 常行三昧

3 半行半坐三昧

4 非行非坐三昧

(1) 諸經に約す

(2) 諸善に約す

## 卷第二（の下）

(3) 諸惡に約す

(4) 諸無記に約す

第二項 広く料簡する

第三節 感大果

第四節 裂大網

第五節 帰大処

## 卷第三（の上）

第二章 稲名

第一節 相待の名

第二節 絶待の名

第三節 異名を会す

第四節 三徳に通ず

## 第三章 顯体

第一節 教相によつて体を顯わす

第二節 次第の教相

第三節 不次第の教相

第四節 眼智によつて体を顯わす

第五節 次第の眼智

第六節 不次第の眼智

第七節 境界によつて体を顯わす

第八節 境を説く意

第九節 境と智の離合

第十節 諦の離合

## 卷第三（の下）

1 智の離合

第十一節 得失を明かす

第十二節 摂法

第十三節 六法を摂める

(3) (11) (10)  
(32) (20)

(9) (12)

- |               |           |
|---------------|-----------|
| 第一項 一切の理を撰める  | 2 持戒の相    |
| 第二項 一切の惑を撰める  | (1) 事の戒   |
| 第三項 一切の智を撰める  | (2) 理の戒   |
| 第四項 一切の行を撰める  | 3 犯戒の相    |
| 第五項 一切の位を撰める  | 4 懺悔      |
| 第六項 一切の教を撰める  | (1) 順流の十心 |
| 第二節 六法が相互に撰める | (2) 逆流の十心 |
- 第五章 偏円**
- |            |  |
|------------|--|
| 第一節 大小を明かす |  |
| 第二節 半満を明かす |  |
| 第三節 偏円を明かす |  |
| 第四節 漸頓を明かす |  |
| 第五節 権実を明かす |  |
- |                  |  |
|------------------|--|
| 第一項 四悉・五時について明かす |  |
| 第二項 四種の止觀について明かす |  |
| 第三項 接通について明かす    |  |
| 第四項 重ねて権実を簡ぶ     |  |
- 卷第四 (の上)**
- 第六章 方便**
- |          |  |
|----------|--|
| 第一節 具五縁  |  |
| 第一項 持戒清淨 |  |
- 1 戒の名**

(8)

- 
- 卷第四 (の下)**
- |           |         |
|-----------|---------|
| 第二項 衣食具足  | 1 衣について |
| 第二項 衣食具足  | 2 食について |
| 第三項 閑居静処  |         |
| 第四項 息諸縁務  |         |
| 第五項 近善知識  |         |
| 第二節 呵五欲   |         |
| 第一項 事の呵五欲 |         |
| 第二項 理の呵五欲 |         |
| 第三節 棄五蓋   |         |
| 第一項 五蓋の病相 |         |
| 第二項 事の棄五蓋 |         |
| 第三項 理の棄五蓋 |         |
- 第四節 調五事**

第一項 事の調相  
第二項 理の調相  
第五節 行五法

## 卷第五（の上）

### 第七章 正修

第一 十境の生起  
第二 十境の互発

第三 灌頂の私料簡・十六問答

第一節 險入界の境を観ず（十乘觀法）

第一項 端坐で觀する十乘觀法

第一支 心は不可思議の境と觀ず

第二支 起慈悲心

第三支 巧安止觀

## 卷第五（の下）

第四支 破法遍

第一 無生門について堅に破す

一 仮より空に入る

1 見の仮から空に入る

(1) 見の仮

(2) 空の観

2 思の仮から空に入る

## 卷第六（の上）

(14)  
(28)  
(29)  
(30)  
(32)

(24)

(15)

(13)  
(16)  
(17)  
(18)  
(19)  
(31)  
(10)

## 卷第六（の下）

4 仮に入る位

(1) 教を歴て位を判ずる  
(2) 利益を明かす  
(3) 法を破すこと遍ねきを結ぶ

三 中道の觀

1 中道の觀を修する意味

2 中道の觀を修する因縁

3 正しく中道の觀を修する

4 位と利益を明かす

第二 横に破す

第三 横と堅の不二で破す

一 総じて一心を明かす

二 他に歴る一心

(1) 思の仮  
(2) 体の觀  
(3) 位を明かす  
3 四門の料簡

二 空から仮に入る  
1 仮に入る意

2 仮に入る因縁

3 仮に入る觀

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

## 卷第七（の上）

第五支 識通塞

第六支 修道品

第七支 対治助開

## 卷第七（の下）

第八支 知次位

第九支 能安忍

第十支 無法愛

結 大車の譬喻

### 第二項 歴縁対境

第一支 歴縁について

第二支 対境について

## 卷第八（の上）

第二節 煩惱の境を観ず

### 第一項 煩惱の相を明かす

第二項 煩惱が起る因縁

第三項 煩惱を治める方法

第四項 止觀を修する

## 卷第八（の下）

第一項 病患の相

第二項 病患が起る因縁

第三項 病患を治す方法

②4

②3

⑧

第四項 損と益を明かす

第五項 止觀を修する

第四節 業相の境を観ず

第一項 業相が発する因縁

第二項 業相が発する相

第三項 業障の不同

第四項 止觀を修する

第五節 魔事の境を観ず

第一項 同異を分別する

第二項 魔事が発する相

第三項 魔事の妨損

第四項 魔事を治す方法

第五項 止觀を修する

## 卷第九（の上）

第六節 禪定の境を観ず

第一項 禪定の開合

第二項 禪定が発する因縁

第三項 諸種の禪定が発する相

一 根本の四禪

二 十六特勝

三 透明禪

②7

②6

⑤

③3

四九 想

五八背捨  
六大不淨

## 卷第九（の下）

七八慈心  
九因縁  
十神通

第四項 止觀を修する

## 卷第十（の上）

第七節 諸見の境を観ず

第一項 諸見の人と法

第一支 邪見の人と不同

一 仏法の外の外道

二 仏法に附す外道

三 仏法を学び外道となる

第二支 邪見人が執する法の不同

第二項 諸見が発る因縁

一 諸見が発る相

二 諸見が発る不同

第三項 諸見の過失

一 得と失を明かす

## 卷第十（の下）

二 並べて真偽を決す

(31)

—— (以上) (以下は講説されなかつた部分)

第八節 増上慢の境を観ず

第九節 二乗の境を観ず

第十節 菩薩の境を観ず

第八章 果報を示す章

第九章 教を起すことを示す章

第十章 帰結する主旨を示す章

(32)

この一覽表から明らかなるように、『心要』に採られた引用文は相当個所に集中していることが知られる。

前半(⑦まで)は主に「円頓章」を中心に、灌頂の序文の文章を使っていることがわかる。

また、「円頓止觀を一つに分かつ。先に略、次に広」として、略説と広説の二段に分けた『心要』の構成法は、明らかに『摩訶止觀』の「五略・十広」の構成にならつたものであることがわかる。それは『心要』の略説の文が大抵は『摩訶止觀』五略段の発大心の文章から集中的に引用して作られており、広説の文が、正修行章からの抄出文で作られていることが知られるからである。殊に広説の文は、十乘觀法の第一

観心是不可思議境、第二起慈悲心、第三巧安止觀、第四破法遍の前四乗からの引用文に限られており、後六乗からの引用文は皆無であり、この点は、「十境」の全体を名だけでも示そらとしている態度とくらべて顯著である。『心要』には「十乘」の語すらみえない。「十乘觀法」を伏せて、「十境」の方を取つた点は『心要』の一つの特色である。

また、破法遍からの引用は、最後の、中道の觀と、横と堅の不二で破す段の二個所の引用文に限られている。前に出る「仮から空に入る」段や、「空から仮に入る」段からは引用されていない。『心要』の作者が、最終的な結論と考える内容の文を抄出したことが知られる。殊に、<sup>21)22)</sup>の抄出文は、分量的にも突出して長文であるし、内容的にも廣説部分の一つの山を成しており注目される点である。

全体的にみると、五略では発大心の段に集中しており、後の修大行（四種三昧）の段以下からの引用はないに等しい状況である。

また、十広では、釈名章・顯体章・攝法章・偏円章については、わずかに顯体章・偏円章からの引用が各一例みられるが、それも各章の課題を明示するためではなく、『心要』の課題に応じて必要な文章を引いただけである。方便章（二十五方便）からの引用は皆無である。これはあるいは「調和五事」（調食・調眠・調身・調息・調心）にみられるような坐禪の

説を嫌つたためであるかも知れない。そのことは正修行章における端坐と歴縁対境という大枠を無視して、歴縁対境のみを取つたことと関係するであろう。『心要』の立場では、慧思の『隨自意三昧』や、智顥の『覺意三昧』などで説く「非行非坐三昧」の立場に立つて、あらゆる場面を想定して、どこでも誰もが実践できるそういう「圓頓止觀」の要点を明示し、仏道修行の一般化を図りたかったということであろう。

そのことがまた、「十境」の説は採用したが、「十乘觀法」の説を伏せさせる結果になったのであり、専ら不思議境・起慈悲心・巧安止觀・破法遍（中道觀と横堅不二の破のみ）の前の四乗の一般的な説に限つて、後の識通塞・修道品・対治助開・知次位・能安忍・無法愛の六乗の個別的な説は全く省みないという事態を生じさせたのである。

### 三、『心要』の成立背景

前節で明らかに、『心要』は『摩訶止觀』の修証論について要所と考えられる教説を端的に示そうとして成った書である。その限りで、『心要』の注釈書として後に成立する『漢光類聚』にみられるような独自の諸見解とは一線を画して読まれるべきものである。その意味で、『心要』は『摩訶止觀』の研究史に現われた一つの成果であつたといつていであろう。

それではなぜ『心要』のような書が作られなければならなかつたのであらうか。

先ず考えられることは、『摩訶止観』の教説があまりにも廣汎にすぎて、体系立った微密な教理を展開しているために、一般には『摩訶止観』の真価は充分に理解されず、したがつて現実の場面で利用されることも少なかつたのではないかとさうかということである。

『摩訶止観』に対するこういう考えは、すでに湛然の頃にはあつたようで、『輔行』卷一之一には、「三種の止観（漸次・不定・円頓）の外に別に心要を伝えれば、すなわち三部の文は無用になるのではなかろうか」という他の人の言葉を記し、こういう考えがいかに誤った考え方であるか解説し、『摩訶止観』のような綿密な教理に依拠しなければ充分な仏道修行とはいえないと弁明している。

しかし一方で湛然は、大部な『摩訶止観』の構成と内容を概説した『止観大意』一巻を著わしているし、三諦三觀の教理だけを説いた『始終心要』のような小著も作っているのである。『始終心要』は従義の『始終心要註』が現存する。湛然門下の染肅が『摩訶止観』の要文を抜き取って作った『刪定止観』三巻などもこれと同じ動向を示すであろう。また、行満には『六即義』があるが、これは『摩訶止観』の「六即」説を取り出して単独に解説した最初の書として注目される。

このように『摩訶止観』の要文を重視し、それらの教説を單獨に学ぶようなことが次第に流行をみるようになるのはむしろ当然のことであろう。恐らく『心要』も湛然以降に現われるこういう動向のなかから成立したのであらうと思われる。

『心要』には、「一切法は皆是れ仏法」とある原文を「一切法は本是れ仏法」と記し、「六即の菩提」の句を「六即六仏」と記し、原文を書き改めているような個所もあつて、幾分、

中古天台の本覚法門よりの表現かと思わされるようなものもみられるが、基本的には『心要』それ自体には、『漢光類聚』のなかで恣まことに解説されているような特別の意味は示されていないといつてよく、『心要』はあくまでも『摩訶止観』の要文要説と考えられるものを集めてまとめたものにすぎない。例えば、「坐禅止観の心要」として著わされた、源信の『止観坐禪記』に「本理の一念」を記し、「本理の一念は毘盧の一念なり、毘盧の一念は靈知の一念なり。靈知の一念は妄念にあらず、無念にあらず、無始の心鏡なり」と記す、本覺法門に頻出するような表現は皆無である。このような説と比べると『心要』は實に素朴な天台止観の概説書であるといえよう。

ともあれ『心要』の教説と『漢光類聚』の解釈の間には、あまりにも開きがありすぎるので、この辺の問題はグローネー氏の最新の力作の論文も合せて、改めて考えてみなければ

ならない別途の大きな研究課題である。

さらに注意すべき点は、『心要』のまとめ方は、『修禪寺決』に引く「止觀大旨」などのまとめ方とは異なることである。

「止觀大旨」それ自体は、湛然の『止觀大意』同様『摩訶止觀』全巻にわたる要旨をまとめたものであるが、『心要』のまとめ方は、湛然の『始終心要』同様天台止觀の要点と考えるものをまとめている。ただし『始終心要』は書きおろした文章であるが、『心要』は抄出文を合成して作ったものであるから、それらの各文に着目した点と、それらの文を合成了手腕に『心要』の独自性をみるべきであろう。

因みに『仏祖統紀』卷十には、遵式に『注南岳心要偈』の著述があつたことを記す。あるいはこの『心要』に対する注偈であつたのかも知れないが、現存していないので事実の程はわからない。寂照が日本から中国に伝えた『大乘止觀法門』に遵式は序文を書いているが、この本も題下に「南岳思禪師曲授心要」と記されているので、前の『注南岳心要偈』とこれが何らかの関連があるのかどうかということも考えられ、興味深い問題も存するが、今は指摘のみにとどめてこの辺で筆を閣きたい。

追記  
『心要』に関する従来の研究状況については、前掲、末木論文を参照されたい。本論をまとめるに当つては、佐々木俊

道「『天台伝南岳心要』について」（『曹洞宗宗学研究所記要五号、一九九二年三月』）を全面的に参考させて頂いた。記して感謝申し上げたい。